

診療所待合室  
「腰痛放浪記」

大山口診療所

久野淑枝

夏樹静子と言えば、知らぬ人はいないミステリー作家ですね。この方が壮絶な腰痛体験をされたことは、案外知られていないでしょう。いわゆる告白本という類の本の中で自らの腰痛体験とその闘病記を描き、自分が心身症患者であったと述べています。

その日は突如として訪れ、ある日から腰痛に支配されて3年もの間、悪戦苦闘されます。夏樹さんは、善意の友人の助言や援助で、次々と各分野の全国的名医の診療を受けます。しかし、一向に良くならない。果ては民間療法、お祓い、霊供養、池の水抜きまで行いますが、当然これでも治らないのです。途中で、痛みの成因を「心因」ではないかと指摘されますが、ご本人が「こんなに痛いのに心因な訳がない！」と頑迷に否定されます。

やがて、ほとんど寝たきりで引きこもり、うつ状態になり、自殺念慮が頭を掠めるなど最悪の状態になります。しかし、ここに至り、いわゆる「底つき体験」を経て、否定していた心療内科の入院体験を経験します。

指一本触れられないこともないのに治るわけがないと、当初は不信感から

猛烈な怒りを爆発させます。それまで誰にも発したことがないような。そして不思議なことに、その後、腰痛が軽快していることに気がつくのです。やがて主治医と向き合い、あるがままに心を解放して、自分と向き合うことで、症状を克服していきます。さまざまな治療を求め放浪した後、全ての原因は己の内に潜んでいたことを悟るのです。治癒は奇跡や僥倖ではなく精神の科学によるものであることを納得するというものです。本当に難治の患者さんでした。

そして、病気を克服した後、やはり聡明な方なので、自分なりに人生の教訓を獲得されています。「人の心ほど、ミステリアスなものはない。目先の幸福、理不尽な不幸に振り回されず、自分の生を歩むしかない。心ひとつでどんな困難も変えられるのではないかと。」

これは一患者の一闘病記です。万人向きというわけではありません。ただ普遍的な深い意味が込められ、なおかつとても読みやすいものです。健康であることに越したことはありませんが、人は時に病気をすることで学ぶこともあるのかも知れません。もし、あなたが痛みでくよくよしたり、途方に暮れているのであれば、何かしら役に立つこともあるのではないかと思います。※自殺念慮：自殺したいと思うこと 僥倖：偶然に得る幸運

参考書：「腰痛放浪記 椅子がこわい」

夏樹静子 新潮文庫

大山恵みの里だより vol. 36

大山ツーリズム協議会が ワークショップ

12月5日、名和公民館で「一緒に考えよう！観光による地域振興」というテーマで「観光カリスマ」の加藤文男氏を講師に迎え、ワークショップを行いました。

当日は大山ツーリズム協議会のメンバー7名が参加。加藤氏からの問題提起をもとに「周年観光地となるために、大山町が誇れる資源・問題点は何か」を個々に書き出しながらカテゴリーごとにとまとめて発表し、意見交換を行いました。

大山町が誇れる資源としては、豊かな自然環境・海山の食の幸・歴史スポットなどが挙げられ、また問題点としては情報発信・人的インフラや意識の問題などが、参加者から挙げられました。

ワークショップの最後は、加藤氏自らが手がけた「道の駅とみうら・



▲問題点を話し合う参加者

枇杷倶楽部（千葉県南房総市）での取組事例について話をいただきました。他の地域との差別化できる地域資源をいかに見つけ、どのように具現化・活用していったのか。「座して衰退を待つのではなく、一気果敢に打って出る」ため、特産の枇杷を活用した商品開発や、集客資源を広域的に束ねて誘客する「一括受発注システム」を稼働させ、地域経済を拡大させる手法など、地域を巻き込んだ取組は大山町にも大変参考になる事例でした。

「全ては志の総和である」という加藤氏の言葉が強く印象に残ったワークショップでした。